

〈協同のひろば〉

地域労組運動の理論と実践の人・永瀬さんの死を悼む

地域労組からの労働者協同組合の探求

木下 武男（東京都／法政大学講師）

永瀬さんとのつきあいは、彼の人生の最後のところにあたる。彼が二度にわたる肝臓癌の切除の手術を終えて、癌病棟から帰還した直後のことだった。今でもよくおぼえてるが、1992年5月22日のこと、外谷さんも参加して私の自宅で夕方から深夜まで話し合った。永瀬さんは自分の身体ことを「小宇宙」といい、世界と日本のことを「大宇宙」といい、両方とも激動の時期だったと話していた。彼にとっては、病気の再発を前提にして、残りの人生を「大宇宙」の混乱を見据えて生きていという思いだったのだろう。

永瀬さんは、東埼労組の専従書記長を長くつとめていたが、彼が、協同総合研究所の会員になるにはそれだけの苦難に満ちた道のりがあった。東埼労組の前身は、全国金属板橋地域支部と全国金属豊島地域支部との両組織である。永瀬さんは横浜市立大学を卒業し、就職した後、まもなくして板橋支部の専従をつとめることになった。

全金属板橋地域支部と言えば、労働運動の研究者のなかではちょっとばかり有名だった。なにしろ60年代中頃には750名を擁していたのである。それが、やがて60年代末に250名に減少し、オイル・ショックをへて80年代後半には150名に減少した。豊島支部も同じような経過を歩む。そして、両組合は、労働戦線再編の時に、連合にも全労連にも加盟せず、独自の路線を選択することになる。思想的には全労連系の活動家と同じ立場であったのに、労働組合のあり方で袂を分かつには、それなりの深い考えがあったに違いない。

このような永瀬さんの運動経験をふりかえれば、彼の解明しなければならないテーマは山ほどあったわけである。彼はよく話していた。何故、日本の労働運動は個人加盟制を重視する視点を失ってしまったのだろうか、労働組合の政党への従

属をどう分析すればいいのだろうか、日本の労働運動をきちんと総括しなければいけない。

そのようななかで、永瀬さんが最も強調し、また独自路線を選んだ理由ともなったのが、「中小企業における労働運動のあり方」というテーマだった。地域支部というのは、中小零細企業の組合が集まった組織である。「単純対決」や階級性の強調だけではすまないことは地域支部の後退の歴史がよく教えている。それではいかなる路線なのか。中小企業分野における労働運動の今後の可能性として彼は、労働者協同組合を発見したのである。いろんな方向から、労働者協同組合に向かう流れがあるが、永瀬さんは中小企業における経営と労働と運動のあり方という道から労働者協同組合にめぐり合った。

しかし、経営的にも困難をかかえている中小企業のなかで、組合運動として労働者協同組合の理念を活かすにはどうすればよいのか。理念を運動の場面に移すのは、まだまだこれからだった。話し合わなければならないことは沢山あった。

永瀬さんが93年6月の立命館大学における協同集会に出席し、さっそうと発言する姿に私は病魔も遠のいたという印象を受けた。しかし、去年の暮れから様態が悪くなった。再発ではない。肝臓の片方を除去しても再生してくるのだが、手術の前の抗ガン剤の投与によって胆管を傷め、肝不全になってしまったのが原因だという。肝臓癌を克服した希な事例だといわれていたというから、返す返すも残念なことだ。たったの3年間のつきあいだったが、癌再発の不安をかかえていたにもかかわらず、楽天的な笑顔をたやさず現実に真摯に向かい合う姿勢に心うたれるものがあった。

日本における労働運動の再生を議論し合える数少ない大切な友人を失った。合掌。